

『バガヴァッド・ギーター』とヨーガの思想（1）

中 村 裕

『バガヴァッド・ギーター』 Bhagavad Gītā（以下、『ギーター』と略す）はインド最大の叙事詩『マハーバーラタ』第6巻の一部を構成するものであり、紀元後5世紀頃までには現在の形になったとされる¹⁾。『ギーター』は本来、古代インドの深遠な哲学思想を背景としてバーガヴァタ派の独立した聖典として成立したものが、『マハーバーラタ』に編入された²⁾と考えられており、今日に至るまで、ヒンドゥー教の聖典としても広く読み継がれてきている。

『ギーター』は古くから「ヨーガ教典」 yogaśāstra とも呼ばれる³⁾ように、様々なヨーガ思想の精髓が述べられており、章毎のタイトルにも、18章すべてに yoga を含むタイトルが付けられている版も多く見られる⁴⁾。また、註釈家として知られるマドゥスーダナ・サラヴァティは『ギーター』の18章を三つに分割し、1章から6章は行為のヨーガを、7章から12章は信愛のヨーガを、そして13章から18章は知識のヨーガを述べたものである⁵⁾と定式化している。即ち、『ギーター』はとりわけ「行・信・知」の解脱道を説くとされてきた。

本論文では、『ギーター』に現われる全ての yoga の用例を検証し、古典的解釈にとらわれることなく、『ギーター』の説くヨーガ思想を整理し、『ギーター』の構造をより深く探ろうとするものである。

1. ヨーガの語義

ヨーガ (yoga) という言葉は動詞語根 yuj から派生した名詞で、古くは『リグヴェーダ』に現われており、元来は車や輓を馬に「繋ぐこと」を意味した⁶⁾。これが転じて「用意すること」「はたらくこと」などを意味し⁷⁾、さらに一般化され「結合」や「合一」などをも表すようになった。この他 yoga は、「治療」、「魔術」、「加算」などをも指し、極めて多義である⁸⁾。『リグヴェーダ』の後に成立した『カタ・ウパニシャッド』では「心作用の統一・感官の制御」の意味で用いられており⁹⁾、更に、ヨーガの根本聖典である『ヨーガ・スートラ』では「心の働きの止滅」(cittavṛttinirodha)¹⁰⁾と定義されている。

yoga は後に精神的修養を重視するラージャ・ヨーガや肉体的訓練を重視するハタ・ヨーガのように行法体系として整備されることになり、今日では一般に、精神的統一に向けた修行を指すことが多い。ちなみに、現代のヒンドゥー教徒は yoga を「神との合一」と解しているが、サーンキヤの二元論に基礎を置いた『ヨーガ・スートラ』では「神との合一」の意味はなく、「三昧」を意味する¹¹⁾。

なお、yoga は修行のさまざまな方法論を指す一方、『ギーター』では yoga が単独に現われる場合には、「ヨーガを達成する」(yogam avāpsyasi) (2.53) に見られるように、「平等の境地」、「ブラフマンとの合一」あるいは「三昧・解脱」などといった修行の到達点を指すことも多い。即ち、yoga が解脱に向けた手段である一方、その到達目標を指すこともあり、手段と目的の両様に使い分けられている。

2. yoga 及び関連語句の統計

『ギーター』には yoga の語が 73 カ所に現われる¹²⁾が、多くの場合、さまざまな修飾語を伴ってそれぞれ個別のヨーガを意味する。以下は単独用法以外の yoga の一覧であり、その内容と用例については、次節以下で個別に解説する。

- karma-yoga (行為のヨーガ)
- jñāna-yoga (知識のヨーガ)
- buddhi-yoga (知性のヨーガ)
- ananya-yoga (ひたむきなヨーガ)
- dhyāna-yoga (瞑想のヨーガ)
- saṁnyāsa-yoga (放擲のヨーガ)
- aiśvara-yoga (神のヨーガ)
- ātma-yoga (自己のヨーガ)
- abhiyāsa-yoga (常修のヨーガ)
- bhakti-yoga (信愛のヨーガ)

一方、yoga が単独に使われる場合は、「修行」、「心統一」、「平等の境地」、「ブラフマンとの合一」あるいは「三昧・解脱」などを意味するが、このうち文脈から上記の個別ヨーガを指すと考えられる場合も多い。『ギーター』の中に現われる全ての yoga について章別用例別に分類・整理したものを付表に示す。

また、yoga 及び上述の個別ヨーガに強い関連性を持つ語句として yogin (修行者)、yukta (心統一した、クリシュナに専心した)、saṁnyāsa (放擲)、yajña (祭祀) さらに、bhakti とその関連語 (bhaktaḥ (献身者)、bhajati (献身奉仕をする) など) についても付表の参考欄に集計結果を掲げる。

個々の用例については次節以下で検討するが、付表に示した統計からも、『ギーター』の構造的特徴の一面が窺える。今、全体を前段 (1 章～6 章)、中段 (7 章～12 章)、及び後段 (13 章～18 章) に分けて概観しておく。まず、行為のヨーガは殆どが前段の 2 章から 5 章に集中している。これについては、先にも述べたマドゥスーダナ・サラヴァティの註解などによる定式化された考えとも齟齬はない。また、放擲¹³⁾は結果を顧みず行為することであり、『ギーター』の中の極めて重要なキーワードの一つである¹⁴⁾が、この語は次節以下で見るように行為のヨーガとの関連性も高く、saṁnyāsa の単独用法の大半が前段に現われていることも頷ける。

知識のヨーガについては、前段に 1 回と後段に 2 回現れるのみであり、集計結果のみからは、定説に言われるように後段の中核テーマであると肯定することは難しい。信愛のヨーガも後段の 14 章に 1 回現れるだけで、前述の定説を裏付けることはできない。ただ、bhakti とその関連語句を見る限り、大半が中段全体に亘り使用されており、中段が信愛のヨーガに関係が深いことが判る。また、クリシュナに知性を集中する知性のヨーガについては、力点を置く特別な章は見出せない。

以上のほか、神的ヨーガと常修のヨーガについては、使用頻度はそれほど多くないが、比較的中段に集中しており、構造的特徴と捉えることができる。なお、単独用法の yoga と yogin は前段、とりわけ 6 章に集中して現われる。これは、6 章がヨーガの定義を掲げ、同時にヨーガ行者の行動について詳述する章であるからである。この章はまた、行為のヨーガやクリシュナへの専心 (yukta) についても述べており、『ギーター』の中でも、総括して結論を語る第 18 章とも併せてとりわけ重要な章の一つとなっている。

3. 単独に現われる yoga の用法

『ギーター』には yoga の単独用法が 30カ所¹⁵⁾あり、そのうちの一部は yoga を定義する記述である。即ち、yoga は、「平等の境地・平等観」(samatva, 2.48d¹⁶⁾、sāmya, 6.33)、「行為の結果を顧みず行為に専心すること」(karmasu kauśalam, 2.50)、「ブラフマンとの合一に専心すること」(brahma-yuktātman, 5.21)、「放擲」(saṁnyāsa, 6.2)、「苦との結合から離れること」(duḥkhasaṁyogaviyogaṁ, 6.23) などと定義されている。以上のうち、「平等心」については、「寒暑や苦楽においても、毀誉褒貶においても、統一された状態」(6.7)であり、「理論知と実践知により自己が充足し、揺るぎなく、感官を克服し、土塊や石や黄金を平等に見」(6.8)、「親しい者、盟友、敵、中立者、中間者、憎むべき者、縁者に対し、また善人と悪人に対し、平等に考える」こと(6.9)との説明がなされている¹⁷⁾。

ヨーガの定義に関係する一例を示すと、

buddhiyukto jahātiha ubhe sukṛtaduṣkṛte
tasmād yogāya yujyasva yogaḥ karmasu kauśalam 2.50

知性をそなえた人は、この世で善業と悪業をともに捨てる。それ故、ヨーガを修めよ。ヨーガは諸行為における巧妙さである。

この「ヨーガを修めよ」(2.50c)は、「ヨーガ(平等の境地)をめざして修行せよ」の意であり、「ヨーガは諸行為における巧妙さ」(2.50d)については、行為者が知性を確立し、行為の結果を顧みず行為に専心すれば、最高の成就に達しうることを意味している¹⁸⁾。

定義以外の大半の yoga (2.53, 6.12, 6.16, 6.17, 6.19, 6.20, 6.29, 6.36, 6.37, 6.41, 6.44, 7.1, 10.7c, 12.1)は、「心統一」、「ブラフマンとの合一」、「三昧・解脱」などの広がりを持った内容を有する。たとえば、

yuktāhāravihārasya yuktaceṣṭasya karmasu
yuktasvapnāvabodhasya yogo bhavati duḥkhaḥ 6.17

節度をもって食べ、散策し、行為において節度をもって行動し、節度をもって睡眠し、目覚めている者に、苦を滅するヨーガが可能である。

のヨーガは心統一を指すと見てよい。

この他、「太古から伝承される神秘的なヨーガ・不滅のヨーガ」(yoga avyaya, 4.1～4.3, 18.75)、「ヨーガに登ろうとするムニ」(āruruḥṣoḥ muneḥ yogam 6.3a)、「ヨーガに登った人」(yoga ārūḍhasya 6.3c, 6.4)などがある。ここで「ヨーガに登る」という表現からは、背景としてヨーガの準備段階から最終の三昧に至るまでの階梯、即ち、八支則¹⁹⁾がイメージされる。

4.1～4.3はヨーガ伝承の歴史を語る部分であり、「不滅のヨーガ」とは『ギーター』全体で説かれている教えを意味する。従って、掉尾を飾る、

vyāsaprasādāc chrutavān etad guhyam ahaṁ param
yogaṁ yogeśvarāt kṛṣṇāt sāksāt kathayataḥ svayam 18.75

私はヴィヤーサ仙のおかげで、ヨーガの主クリシュナが自ら最高の秘密であるヨーガについて語った時、彼から直々にそれを聞いた。

の二行目冒頭の yoga もこの意味に解釈することができる。また、

sarvabhūtaṣṭham ātmānaṁ sarvabhūtāni cātmani

ikṣate yogayuktātmā sarvatra samadarśanaḥ 6.29

ヨーガに専心し、一切を平等に見る人は、自己（アートマン）を万物に存すると認め、また万物を自己のうちに見る。

の yoga-yukta-ātmā は真理を悟った人のことで、この yoga は「ブラフマンとの合一」と解釈することができる。

yoga の語は現われないが、5.19-20 では「平等の境地」が「ブラフマンとの合一」と同じであることを説く。そのすぐ次の詩節、

bāhyasparśeṣv asaktātmā vindaty Atmani yat sukham
sa brahmayogayuktātmā sukham akṣayam aśnute 5.21

外界との接触に執心せず、自己のうちに幸福を見出し、ブラフマンのヨーガに専心し、彼は不滅の幸福を得る。

では、yoga は「結合」と解釈することも可能であるが、5.24 では涅槃に達する前提としてブラフマンとの合一が述べられており、これらの文脈から brahmayoga を「ブラフマンとの合一に専心すること」と理解することが適切である。

4. 行為のヨーガ

行為のヨーガ (karma-yoga) は、全ての行為²⁰⁾を絶対者に捧げて、結果を顧みずにひたすら行為そのものに専心することを意味し、クシャトリアヤであるアルジュナの行動規範 (varṇāśrama dharma) として最も重要で注目すべき修行道である。行為の結果を顧みず行為を超越することにより最高の成就に達することができる。『ギター』では行為のヨーガは 19 カ所に現れ、大半が 2 章から 5 章にかけて説かれている²¹⁾。しかし、このうち karma-yoga として記載されるのは 5 カ所であり、残りは yoga の単独用法のうち、文脈から行為のヨーガと判断されるものである。

最初に karma-yoga が現われるのは、

lokesmin dvidividhā niṣṭhā purā proktā mayānagha
jñānayogena sāṅkhyānām karmayogena yoginām 3.3

アルジュナよ、この世には二種の立場があると前に私は述べた。すなわち、知識のヨーガによる理論家の立場と、行為のヨーガによる実践者の立場とである。

の中の 3.3d である。ここは、理論的なサーンキヤ（即ち、知識のヨーガ）と実践的な行為のヨーガの異なる二つの解脱道があることを述べた詩節であり、他にも 2.39、5.4、5.5、13.24 で両者が並立して言及される。4 章では知識のヨーガの完成には行為のヨーガの完成が前提となる（4.33）ことを述べるが、これは俗世間でのことであり、真のヨーガ実践者 yogin にとって、即ち、修行を積んだ出家者の世界では、サーンキヤとヨーガの両者は等しく、その成果もまた同じであることを説いている。

また、

yogasthaḥ kuru karmāṇi saṅgam tyaktvā dhanañjaya
siddhyasiddhyoḥ samo bhūtvā samatvaṃ yoga ucyate 2.48

アルジュナよ、執着を捨て、成功と不成功を平等のものとして見て、ヨーガに立脚して諸々の行為をせよ。ヨーガは平等の境地であるといわれる。

の冒頭に現われる *yogasthaḥ* は一般には「つりあっている」を意味するが、「ヨーガに立脚して」と解釈し、諸々の行為をなす *karma-yoga* のことを指すと見ることができる。一方、2.48d の *yoga* は特に *karma-yoga* と限定的に解釈する必要はなく、「平等の境地」と解釈しても不都合はない²²⁾。

行為のヨーガを中心に述べる3章では、運動器官を制御し、マナス（意）を働かせるのは迷える人である(3.6)と述べ、一方、その次の詩節、

*yas tv indriyāṇi manasā niyamyArabhaterjuna
karmaindriyaḥ karmayogam asaktaḥ sa viśiṣyate* 3.7

しかし、思考器官により感官を制御し、執着なく、運動器官により行為のヨーガを企てる人、彼はより優れている。

では、逆にマナスにより感官を制御し、運動器官により行為のヨーガを企てる人が真の *yogin* であることを説く。

4章の後半は『ギーター』の祭祀観を説く部分であり、さまざまな祭祀の形態が紹介される。ここには「感官と氣息の働きをヨーガという火 (*yogāgni*) にくべる (4.27)」、「ヨーガを祭祀として (*yoga-yujñāḥ*) 捧げる (4.28)」、「ヨーガにより成就した人 (*yoga-saṃsiddhaḥ*) は自己のうちに知識を見出す (4.38)」、「ヨーガにより行為を放擲する人 (*yoga-saṃnyasta*) (4.41)」、「ヨーガに依拠せよ、立ち上がれ (*saṃśayaṃ yogam ātiṣṭhottīṣṭha*) (4.42)」が現われる。これらの *yoga* は全て祭祀のための最高神に捧げる行為を意味し、いずれも *karma-yoga* を指すと解釈することができよう。

行為の放擲と行為のヨーガについてのアルジュナの質問 (5.1) に対して、クリシュナは行為のヨーガが行為の放擲に優れることを説く。ここで言う行為の放擲は、文脈から単に行為の放棄のことであり、行為の実践が行為の放棄に優れることは常識面からも理解できる。一方、すぐ後の、

*saṃnyāsa tu mahābāho duḥkham āptum ayogataḥ
yogayukto munir brahma nacireṇādhiḡacchati* 5.6

しかし、行為の放擲は行為のヨーガなくしては達成されがたい。行為のヨーガに専心した聖者は、遠からずブラフマンに達する。

に述べる行為の放擲は、単に行為を止めることではなく、行為を最高神に捧げることを指し、さらに結果を顧みない行為のヨーガよりも高次の概念としている。

行為のヨーガに専心し、それを極めたヨーギンは、自己と万物が一体化した平等の境地に達し、罪悪にも汚されることはないことを下記の詩節で説いている。

*yogayukto viśuddhātmā vijitātmā jitendriyaḥ
sarvabhūtātmabhūtātmā kurvann api na lipyate* 5.7

行為のヨーガに専心し、自己を清め、自己を制御し、感官を制し、その自己が万物の自己となった者は、行為をしても汚されない。

以上見てきた通り、クリシュナはアルジュナに「人間は誰しも行為をしなければならず、クシャトリヤの義務は戦闘に立ち向かうことであり、結果を顧みず行為することにより、究極の寂靜に達する」と説いて、アルジュナの苦悩を解き放ち、戦闘への行動を決意させるのである。

5. 知識のヨーガ

知識のヨーガは、「最高神に関する知識に専心すること」である。これは『ギーター』の要となるヨーガ思想の一つとされるが、jñāna-yoga として記載されるのは2カ所（3.3、16.1b）に過ぎず、もう1カ所は jñāna-yoga と同義の saṁkya-yoga として現われる（13.24）。前節で述べた通り、3.3 と 13.24 は実践的な行為のヨーガに対し、サーンキヤの立場を対比して述べた詩節である。第16章は神と悪魔の資質について解説しており、16.1b に現われる知識のヨーガは、単に神的な資質に生まれた者の属性の一つとして挙げられているに過ぎない。要は、以上の3カ所には、知識のヨーガに関する具体的な内容説明や重要性に関する言及は見られない。

一方、「祭祀」は「神に捧げる全ての行為のこと」であるので、知識の祭祀 jñāna-yajña も知識のヨーガと同じ内容を持つと解釈することができる。知識の祭祀は3カ所（4.33、9.15、18.70）に現われる²³⁾。たとえば、

śreyān dravyamayād yajñāj jñānayajñāḥ paramtapa
sarvaṁkarmākhiḷaṁ pārtha jñāne parisamāpyate 4.33

知識の祭祀は財物よりなる祭祀よりも優れている、アルジュナよ。全ての行為は残らず知識において完結する。

の詩節では、知識の祭祀が財物の祭祀と比較される。他の箇所（9.15、18.70）では「知識の祭祀により最高神を供養する」と記載される。祭祀に伴う知識は最高の浄化具（pavitra）である（4.38）から、この知識により疑惑を絶つことが可能となり、その結果最高の寂静に達し得る（4.41）のである。

ヨーガ哲学においては、さまざまな「知」（jñāna、viveka 等）の確立とその働きが無明を解消し、最高の成就をもたらす。知識は一般に、成就に至る過程、即ち、解脱道において極めて重要な役割を演じている。『ギーター』においても全体を通して知識の重要性に疑問の余地はないが、上に見た通り、知識のヨーガが中段のテーマとなっているという古典的註釈家による定説には頷けない面がある。

（本稿は、論文原案が規定枚数を超えるため二分割した論文の前段部分である。）

【原典及び翻訳】

The MAHABHARATA critically edited by S. K. Belvalkar (Bhandarkar Oriental Research Institute, Poona, 1947) 6.23.1 ~ 6.40.78 (Vol. 7, pp. 114-188)

S. G. Mudgal, *The Bhagavad Gita – Sanskrit text, English translation and Notes* (Himalaya Publishing House, Mumbai, 2003)

Franklin Edgerton, *THE BHAGAVAD GĪTĀ* (Harvard Oriental Series Vol 38-39, 1952)

辻直四郎『バガヴァッド・ギーター』（インド古典叢書、講談社、1980）

上村勝彦『バガヴァッド・ギーター』（岩波文庫、1992）

鎧淳『バガヴァッド・ギーター』（講談社学術文庫、2008）

- ・文中で、上記の邦訳書に言及するときは、「辻訳」、「上村訳」等の簡略表現を用いた。
- ・本論文の用語及び文章の和訳は主として上村訳を採用した。
- ・『ギーター』に現われる yoga 及び関連語句の検索には、Sanskrit 版電子テキスト（http://www.sacred-texts.com/The_Bhagavad_Gita_in_Sanskrit）を使用した。

・第13章に関しては、上記の批判的 Poona 版は 34 詩節であるが、Madras 版の他一部の流布本では 35 詩節となっている。この相違は冒頭詩節にアルジュナの質問の有無による。本論文の詩節番号は前者に準拠した。

註

- 1) 北川清仁『インド思想—その経験と思索—』(自照社出版、2000) p. 7
- 2) 金倉圓照『インド哲学史』(平楽寺書店、1979) p. 81
- 3) 辻訳 p. 392。
- 4) たとえば、原典では、Bombay and Calcutta Edition、英語版では、Franklin Edgerton の英訳書など。
- 5) たとえば、1500 年頃の『ギーター』注釈者マドウスーダナ・サラヴァティエーの註解(島岩・引田弘道『『バガヴァッド・ギーター註解』和訳(序章)』『人間文化』第3号、愛知学院大学人間文化研究所紀要、1988、p. 156)
- 6) 中村元『ヨーガとサーンキヤの思想』(中村元選集 [決定版] 第24巻、春秋社、1996) pp. 5-7
- 7) 服部正明訳「死神の秘教—カタ・ウパニシャッド」(『バラモン教典 原始仏教』中央公論社、1979、pp. 130-151) p. 151
- 8) Vaman Shaivaram Apte, *The Practical Sanskrit-English Dictionary* Revised and enlarged edition (Rinsen Book Co., 1978) では、yoga に 42 の意味を掲げる。ちなみに、F. Edgerton は、上記の辞書には見当たらないが、yoga の訳語として discipline を当てている。
- 9) 『カタ・ウパニシャッド』6.10-11
- 10) 『ヨーガ・スートラ』1.2
- 11) Bangali Baba, *Yogasūtra of Patañjali with the Commentary of Vyāsa* (Montilal Banarsidass Publishers Private Limited, Delhi, 1976) p. 1
- 12) yoga を含む合成語のうち、ヨーガ思想と関係性の薄い語句 (yogakṣema (至福・解脱、安寧)、niryogakṣema (財産の獲得と保身から自由になって)、saṃyoga (結合)、viyoga (分離)、yogeśvara (ヨーガの主)) は統計から除外した。
- 13) 「放擲」は上村訳による saṃnyāsa の訳語であり、辻訳は「遠離」、鏗訳は「捨離」を当てる。
- 14) 『ギーター』の翻訳者の一人である上村勝彦は、「本書の主題は「放擲のヨーガ」であると確信した」と述べている。(上村勝彦『『バガヴァッド・ギーター』における放擲のヨーガ』(国学院雑誌 第92巻第11号 1991、pp. 199-215)
- 15) 単独用法の yoga のうち、karma-yoga などの個別ヨーガを指すと判断される場合には、yoga 単独用法の統計から除外し、個別ヨーガとしてカウントした。
- 16) 『ギーター』の大半の詩節 (Sloka) は各行が 8 音節からなる 4 行で構成される。順に a,b,c,d とし、同じ詩節に複数の yoga の語がある場合には詩節番号に a,b,c,d を付して区別する。
- 17) 「平等心」に関しては、『ハタ・ヨーガ・ブラディーピカ』(4.111) にも「サマーディに融合したヨーガ行者は、寒熱を区別せず、同様に、幸がなく、不幸がなく、また、尊敬もなく、誹謗もない」と同じような内容の記載が見られる。
- 18) 上村訳の訳注 (p. 150) 参照。
- 19) 八支則 aṣṭa-āṅgāni とは、禁戒 yama、勸戒 niyama、坐法 āsana、調気法 prāṇāyāma、制感

pratyāhāra、凝念 dhāraṇā、静慮 dhyāna、三昧 samādhi を指す。(『ヨーガ・スートラ』2.28 – 3.3)

- 20) 行為の具体的な内容として、古典的注釈家は「苦行・聖地・布施・祭祀などへの専念」(ヤーナム)、「調息法や制感など」(シャンカラ) を挙げている。(上村訳 p. 163)
- 21) Bombay and Calcutta Edition 他、特に第3章の章タイトルを karma-yoga とする版が多い。(S. Soerensen, *An Index to the Names in the Mahabharata*, Montilal Banarsiddass, 1963(reprinted), p. 26)
- 22) 辻訳 (p. 49) では、2.48d の yoga を「カルマ・ヨーガ」と解釈している。
- 23) 知識の祭祀 (3カ所) については、附表の yoga 統計に含まれていない。

付表. Bhagavad Gītā における章別・用例別 yoga 及び関連語句の出現頻度

| 章 | 詩節数 | yoga 出現回数 | yoga 単独用法 | karma (行為) | jñāna (知識) | buddhi (知性) | samyāsa (放棄) | aiśvara (神的) | abhiyāsa (常修) | bhakti (信愛) | ＜参考＞ | | | | | |
|----|-----|--------------|--------------|---------------|---------------|----------------|-----------------|-----------------|------------------|----------------|-------|-------|---------|-------|----------|----|
| | | | | | | | | | | | yogin | yukta | samyāsa | yajña | bhakti 等 | |
| 1 | 47 | 0 | | | | | | | | | | | | | | |
| 2 | 72 | 7 | 4 | 2 | | 1 | | | | | 6 | | | | | |
| 3 | 43 | 3 | | 2 | 1 | | | | | | | 1 | 1 | 2 | | |
| 4 | 42 | 8 | 3 | 5 | | | | | | | | 1 | 1 | 1 | 17 | 2 |
| 5 | 29 | 10 | 1 | 9 | | | | | | | | 2 | 7 | 3 | 1 | |
| 6 | 47 | 18 | 18 | | | | | | | | | 16 | 5 | 3 | | 2 |
| 7 | 30 | 2 | 1 | | | | | 1 | | | | | 4 | | 1 | 5 |
| 8 | 28 | 4 | | | | | | | 4 | | | | 4 | | 3 | 2 |
| 9 | 34 | 2 | | | | | 1 | 1 | | | | | 4 | 1 | 4 | 12 |
| 10 | 42 | 4 | 1 | | | 1 | | 2 | | | | 1 | 1 | | 2 | 2 |
| 11 | 55 | 2 | | | | | | 2 | | | | | | | 1 | 2 |
| 12 | 20 | 4 | 1 | | | 1 | 1 | | | 1 | | 1 | 3 | 1 | | 6 |
| 13 | 34 | 3 | | 1 | 1 | 1 | | | | | | | | | | 2 |
| 14 | 27 | 1 | | | | | | | | 1 | | | | | | 1 |
| 15 | 20 | 0 | | | | | | | | | | 1 | 1 | | | 1 |
| 16 | 24 | 1 | | | 1 | | | | | | | | | | 3 | |
| 17 | 28 | 0 | | | | | | | | | | | 1 | | 8 | |
| 18 | 78 | 4 | 1 | | | | | | | | | | 2 | 3 | 4 | 6 |
| 計 | 700 | 73 | 30 | 19 | 3 | 6 | 2 | 6 | 6 | 1 | 28 | 40 | 14 | 51 | 43 | |

注1：単独に現われる yoga については、文脈から特定の yoga を指すと考えられる場合にはそちらに分類し、残りは単独用法とした。

注2：karma から bhakti までの列は、それぞれ karma-yoga、・・・ bhakti-yoga の章別出現回数を示す。

注3：「知識のヨーガ」 jñāna-yoga には、「サーンキヤ・ヨーガ」 sāmkyā-yoga を含む。

注4：「知性のヨーガ」 buddhi-yoga には、「ひたむきなヨーガ」 ananya-yoga 及び「瞑想のヨーガ」 dhyāna-yoga を含む。

注5：「神的ヨーガ」 aiśvara-yoga には、「自己のヨーガ」 ātma-yoga を含む。

注6：参考欄の「bhakti 等」には、bhakti (信愛) のほか、bhaktaḥ (献身者)、bhajate (献身奉仕をする) 等を含む。